

主要講演抄録集

(敬称略)

特別講演

教育講演

ハンズオンセミナー

シンポジウム

特別講演 1

医療と生活をつなぐ義肢装具支援 ～医師と理学療法士が語るフォローアップの実際～

座長：馬山 泰次郎（第29回広島県理学療法士学会 学会長）

地方独立行政法人 広島市立病院機構 広島市立リハビリテーション病院
杉原 勝宣

理学療法士の教育において装具という分野は大学や専門学校で学ぶと思います。しかし臨床に出て、どの下肢装具をいつ作製するか、皆さん知見をお持ちでしょうか。これは個人の努力だけでは難しく、処方する医師、病院や施設に定期的に入出入りしている義肢装具士、指導してくれる理学療法士の先輩や同僚がいる職場環境等が必要です。私が勤務する広島市立リハビリテーション病院ではここ5年平均で年36.5件の短下肢装具、9.5件の長下肢装具を治療用装具として作製しています。治療用装具を作る際は償還払い（立替払い）であるため、入院費とは別にお金がかかります。装具の目的や効果（必ずしも歩行に到達しない場合でも移乗や立位の安定につながる等）は理学療法士が説明するとしても、費用のことは後でトラブルにならないように、主治医が家族等に同意を取り、カルテに記載しておくことが大切です。また、広島市更生相談所では年平均76.6件の短下肢装具、5.4件の長下肢装具を補装具として支給しています。広島市では毎週1回補装具の支給判定を行っています。県内ではその回数が少なく、補装具支給制度がうまく活用されていないという話も聞きます。それでもし不都合があれば、県士会として県に要望を上げる必要があると思います。



急性期病院の入院期間が短くなりリハビリテーション回復期病棟入院時中で下肢装具を作る事が一般的かと思います。しかし回復期病棟でもリハビリテーション科以外では装具処方の経験がない医師も多いですし、退院後、在宅や施設となった生活期でも同様です。そこで歩行や移動に関する専門家である理学療法士には一人でも多く、下肢装具について詳しくなっていただきたいと期待しています。

内科に薬、外科に手術があるように、リハビリテーション治療には装具療法という、専門性の高い武器があります。理学療法士の皆さんに希望することは①装具を作成し、実際に臨床場面で使用することができる事。②装具に関わる制度について説明できること。とくに②については、治療用装具として医療保険で作成し、その後は日常生活で使う補装具として身体障害者手帳をもって、自ら役所の障害福祉課に申請し、特に成人の場合は更生相談所で判定を受け、支給を受けるという流れです。福祉は申告制ですから、本人や障害者家族が装具の故障で困っていたり、手続きに関してどこに相談してよいかわからない場合等、関係する専門職の誰かが働きかけないと、下肢に過剰な負担がかかったり、歩行機能低下もあり得ます。

補装具のフォローアップも重要な問題です。携帯電話のアプリを使った管理等、有効と思われる方法があり、いくつか紹介したいと思います。

補装具について困った場合、広島市更生相談所でも相談を受けております。今回の講演をきっかけに皆さんに周知いただき、広島県内で装具難民がでないような環境を作れたらよいと思います。

略 歴

【学歴】

1989年3月 広島大学附属福山高等学校卒
1995年3月 防衛医科大学校卒
2013年3月 広島大学大学院医歯薬学総合研究科博士課程 修了

【職歴】

1995年4月～ 防衛医科大学校附属病院 研修医課程
1997年4月～ 自衛隊横須賀病院 整形外科
1999年4月～ 防衛医科大学校 リハビリテーション部 専修医課程
2001年4月～ 自衛隊舞鶴病院 整形外科
2002年4月～ 厚生連 土浦協同病院 リハビリテーション科
2007年4月～ 藤田保健衛生大学七葉サナトリウム リハビリテーション科
同年10月 広島市総合リハセンター準備室（現 広島市立リハビリテーション病院）
2019年 広島市更生相談所長 兼務
2023年 地方独立行政法人 広島市立病院機構 広島市立リハビリテーション病院 副院長
現在に至る

【資格等】

1995年 医師免許
2000年 リハビリテーション専門医
日本リハビリテーション医学会 代議員
日本リハビリテーション医学会中国四国地方会 幹事

特別講演 2

医療と生活をつなぐ義肢装具支援 ～医師と理学療法士が語るフォローアップの実際～

座長：馬上一 泰次郎（第29回広島県理学療法士学会 学会長）

広島市 健康福祉局障害福祉部 身体障害者更生相談所
組地 秀幸

病院を退院し、地域生活に移行することは、濃厚な医療管理下から外れ、生活上の諸般において自己管理が求められるようになることを意味します。地域生活を支える我が国の社会保障制度は介護保険法によるものと、障害者総合支援法によるものが主といえ、それぞれに居宅、施設、用具のサービスが準備されています。用具については介護保険法では「福祉用具」を貸与（レンタル）する、障害者総合支援法では「補装具」「日常生活用具」を購入する仕組みになっています。本日の標題にある義肢装具は、製作に陽性モデルを用いるなど個別性が高く、貸与での対応は困難なことから、「福祉用具」ではなく「補装具」での対応となります。つまり、訓練用義足、治療用装具を持って退院した後、地域生活の中で、適切に、継続して、効果的に義肢装具を使用し続けるには、利用者、支援スタッフである理学療法士とものが「補装具」の制度を理解しておくことが有用となります。



義肢装具は時間経過とともに損耗劣化が進みます。同様に、身体機能も時間経過とともに変化します。損耗劣化や身体機能の変化から生じる不具合・不適合は、利用者自身の点検や訪問リハ等の理学療法士の評価、義肢装具製作所の義肢装具士の調整、修理が適切なタイミングで行われることにより、早期に解消することもできます。しかし、利用者本人は義肢装具を生活に使用しながらも、時間経過の中でそれにどのような変化が起こるのかを理解しておらず、自己管理ができていないと感じています。利用者自身が自分の義肢装具の点検を行うには、地域生活への移行時にわかりやすいツールを用いた丁寧な説明が効果的と考えます。

とはいえ、義肢装具の調整、修理にも限界があり、再作製（更新）が必要となる時期が来ます。「補装具」の更新を制度の利用で行うには、行政窓口への申請が必要となりますが、租税による作製購入費用の支給を行う制度の性格上、その申請には必然性が求められます。窓口では、身体障害者手帳の所持と認定内容により資格要件の確認が、現有補装具の作製時期により耐用年数の経過確認が、修理の可能性の検討の有無により更新の合理性の確認が行われます。これらは申請前に準備しておきたい点です。

行政窓口での「補装具費の支給」申請が受理されると、その希望種目が義肢装具の場合、次に身体障害者更生相談所での判定が行われます。更生相談所では、義肢装具の身体機能への補完性、長期間の継続使用、使用による生活上の効果などに着目しつつ、利用者本人から使用状況や生活の様子、申請の経緯などを聴き取ります。しかし、訪問リハなど理学療法士と関りがある利用者本人から「装具の相談はしていない。」「装具に関するコメントはなかった。」との発言をよく聞きます。理学療法士の義肢装具への評価内容や更新時の意図は、口頭では利用者に伝わらず、結果、更生相談所にも伝わらないと思っています。

日々続いていく地域生活において大きな意味を持つ義肢装具の更新の判定に際して、療法士の意見は重要なのです。皆さんには、伝言ではない形で、更生相談所に意見や考えを提示いただきたいと思います。

略歴

1992年4月 広島市入職。身体障害者更生相談所勤務
2008年4月 広島市総合リハビリテーションセンター開設により同センター総合相談室所属
2014年4月 組織改編により広島市身体障害者更生相談所所属

2012年～現在 全国身体障害者更生相談所長協議会 補装具判定専門委員会 委員
2023年 福祉機器開発普及等事業 義肢装具等完成用部品のデータ連携等に関する検討 検討委員

教育講演

呼吸リハビリテーションの継続支援に必要な視点 ～病院から在宅への連携～

座長：梶原 大輔（第29回広島県理学療法士学会 副学会長）

医療法人社団CMC コールメディカルクリニック広島
小田 泰崇

在宅呼吸療法の発展は、多くの慢性呼吸不全患者の在宅生活を可能にした。これに伴い、在宅呼吸リハビリテーション（以下、リハ）の対象者は拡大し、ニーズは増加している。慢性呼吸不全患者には呼吸リハが適応となる疾患が多く、慢性閉塞性肺障害（COPD）、神経筋疾患、脊髄損傷などが含まれる。重度の慢性呼吸不全を呈し終末期を自宅で過ごしたい患者、人工呼吸器を装着した患者、多疾患を併存し複数の医学管理を必要とする患者も対象である。従って、在宅呼吸リハの役割は広く、呼吸機能や身体機能を維持改善することに加えて、終末期の症状緩和、在宅呼吸療法に使用される医療機器を含めた生活の構築、経過を予測し急性増悪や合併症を早期に発見することも含まれる。

在宅呼吸リハは、運動療法、呼吸練習、コンディショニング、ADLトレーニング、セルフマネジメント教育、心理社会的サポートなどで構成される。在宅呼吸リハの利用者は高齢で、要介護度が高く、生活環境下で呼吸リハを実施するため、生活上の課題を具体化することが可能なADLトレーニングに比重が置かれる傾向にある。歩行困難、終末期など全身状態が低下している利用者には、呼吸練習やリラクゼーションなどのコンディショニングを主体に介入する。訪問時以外の時間にも呼吸リハを自然に継続できるよう自主トレーニングを工夫し、在宅酸素療法の適切な使用法、息切れへの対処など、家族を含めたセルフマネジメント教育も重要である。最近では、管理栄養士による訪問栄養指導も可能となり、多職種で支える在宅呼吸リハが実践されている。

COPDに代表される慢性呼吸不全患者では、病期が進むと呼吸困難のため活動性は低下、動かないから食欲も低下し体重は減少、さらに筋力低下という悪循環に陥り、身体活動性は低下する。身体活動性はCOPDの重症度にかかわらず生存率と関連することが明らかとなり、この悪循環を断ち切るためには、酸素療法や薬物療法だけでなく、呼吸リハビリテーション、栄養指導、精神的ケアを含めた、多職種呼吸ケアチームで対応する必要がある。人工呼吸器装着患者では、拘束性換気障害を引き起こさないよう十分な人工呼吸器による補助を行うこと、早期から排痰補助装置を導入し、気道クリアランスを維持することが重要である。

本講演では、当クリニックの取り組みを紹介し、在宅からみた呼吸リハ継続支援に必要な視点について考える機会としたい。



略歴

1996年3月 山口大学医学部医学科卒業
1996年4月 山口大学医学部附属病院 救急部
1997年6月 国立東静岡病院 外科（現 国立病院機構静岡医療センター）
1999年9月 山口大学医学部附属病院 先進救急医療センター 医員
2003年7月 国立下関病院 救急部（現 国立病院機構関門医療センター）
2004年9月 山口大学医学部附属病院 先進救急医療センター 医員
2005年2月 山口大学医学部附属病院 先進救急医療センター 助手
2008年3月 パージニア州立大学医学部 解剖神経生物学講座 研究員
2010年3月 山口大学医学部附属病院 先進救急医療センター 助教
2011年4月 山口大学医学部附属病院 先進救急医療センター 講師
2012年10月 山口大学大学院医学系研究科 救急・総合診療医学分野 准教授
2019年4月 医療法人社団CMCコールメディカルクリニック広島 院長
2024年4月 医療法人社団CMCコールメディカルクリニック広島 理事長

【資格】

医学博士
日本救急医学会救急科専門医・指導医
日本集中治療医学会専門医
日本外科学会認定医
日本在宅医療連合学会専門医

ハンズオンセミナー1

スポーツ現場における障害予防とトレーニング ～女子アマチュアサッカーチームトレーナーの経験から伝えたいこと～

座長：松村 正幸（株式会社ひなた 訪問看護リハビリステーションひなた庚午）

広島都市学園大学 健康科学部 リハビリテーション学科 理学療法学専攻
上川 紀道

国際サッカー連盟によると、女子サッカーは世界的に競技人口が拡大しており、日本においても幅広い世代で普及している。一方で、女子選手における前十字靭帯(ACL)損傷は世界的にも大きな問題となっている。男子と比較して発生率が高いことが知られており、復帰までの長期離脱や再断裂のリスクは選手の競技人生に大きな影響を及ぼす。これは、私が女子アマチュアチームのトレーナーとして活動してきた約3年間の中でも何度か遭遇してきた事実である。本セミナーではその経験を基に、女子サッカー選手の障害予防とトレーニングについて報告し、実技を交えて紹介する。

セミナーでは、はじめに所属チームの特徴と活動状況について触れる。女子アマチュア選手は仕事と両立しながら競技を継続しており、限られた時間や環境の中で効率的なトレーニングが求められる。しかし、試合中や練習中の障害に加えて、仕事での怪我や疲労も影響し、コンディションを整えることは非常に困難である。さらに、慢性的な疼痛を抱えながら、靭帯損傷や肉離れなどの突発的な障害が発生することも少なくない。その中でも、長期の離脱を余儀なくされる代表的な障害がACL損傷である。多くは非接触型であり、着地や繰り返し動作に伴う膝外反や股関節コントロール不良が主な原因とされる。所属チームの詳細なデータは公表を控えるが、全体的な発生状況については共有する予定である。

一方、国際的にも有効性が示されている予防プログラムとして「FIFA 11+」がある。このプログラムは神経筋協調性や体幹・下肢の安定性向上を目的としたエクササイズを体系的にまとめており、ACL損傷発生率を有意に低減させることが報告されている。そのため、所属チームでも試合前のウォーミングアップに一部を取り入れている。

さらに近年導入しているのがウォーターバッグを用いたトレーニングである。内部の水が動くことを利用した水慣性負荷トレーニングであり、体幹や下肢の安定性を高めるツールとして有用である。スクワットや片脚立位、ステップ動作に組み合わせることで、姿勢制御能力や神経筋協調性の向上が期待できる。本セミナーでは参加者にも実際に基本的なトレーニングを体験していただき、その効果を実感していただく予定である。

特筆すべきは、今回の会場がエディオンピースウイング広島のウォームアップ室であり、普段は立ち入ることのできない特別な空間で行われる点である。このような貴重な機会を活かし、選手が実際に行っている試合前のウォーミングアップとトレーニングを体験し、可能な限り体を動かしていただきたいと考えている。スポーツ現場に直接携わっていない方々にも是非ご参加いただき、障害予防の視点や具体的な実践方法が運動指導の一助となれば幸いである。



略 歴

【学歴】

1996年3月 広島県立広島皆実高等学校体育科 卒業
2000年3月 立正大学社会福祉学部人間福祉学科 卒業 学士（人間福祉学）
2004年3月 広島医療保健専門学校理学療法学科 卒業
2013年3月 広島大学大学院保健学研究科博士課程前期 修了 修士（保健学）
2019年9月 広島大学大学院医歯薬保健学研究科博士課程後期 修了 博士（保健学）

【職歴】

2004年～2007年 医療法人社団飛翔会 寛田クリニック・呉整形外科クリニック
2007年～2009年 医療法人社団 CMC コールメディカルクリニック広島
2009年～2017年 広島医療保健専門学校理学療法学科 専任教員
2017年～2020年 広島都市学園大学健康科学部リハビリテーション学科 講師
2020年～現在 広島都市学園大学健康科学部リハビリテーション学科 准教授

【活動】

2023年～現在 日本女子サッカーリーグなでしこ 2部 DIAVOROSSO 広島 トレーナー
2024年～現在 広島市立沼田高等学校サッカー部 トレーナー

【資格】

認定理学療法士（運動器）、NSCA-CPT、JATI-ATI

ハンズオンセミナー2

スポーツ現場における障害予防とトレーニング ～プロ野球トレーナーの経験から伝えたいこと～

座長：前田 慎太郎（医療法人和光 和光整形外科クリニック）

active conditioning support H2O

宮本 健志

近年、スポーツ現場において障害予防はますます重要視されており、その担い手として理学療法士に期待される役割は年々拡大している。競技レベルに関わらず若年層アスリートからトップレベルの競技者まで、障害を未然に防ぎ、長期的にパフォーマンスを発揮できる身体を作ることは、治療と同等以上に重要である。プロ野球はインシーズンが長期間であり、過密なスケジュールや高い競技負荷のある環境では、障害予防とコンディショニングの重要性は極めて高い。

本セミナーでは、プロ野球トレーナーとして13年間活動した経験をもとに、スポーツ現場における障害予防とトレーニングの実際について紹介する。

セミナーの前半では、プロ野球トレーナーの業務内容と現場で得られた学びを報告する。私はこれまでプロ野球選手のアスレティックリハビリテーションに加え、ウォーミングアップやフィジカルチェック、トレーニング指導、コンディショニング管理に携わってきた。現在はアマチュアチームサポート、学生野球選手を担当することが多い。プロ野球とアマチュア野球では環境面にも大きな違いがあり、また育成年代の指導には成長過程、個人差など考慮すべき点が多いと感じている。本セミナーでは、その経験を基に、スポーツ現場における障害予防とトレーニングの実際を紹介する。

後半は、参加者と共にハンズオン形式での体験を行う。プロ野球現場で実際に行っていたトレーニングや簡便な身体評価を体験する。動作を通じて可動性・安定性を評価し、そこからトレーニングへつなげる流れを参加者同士で実践し体感いただく。体験を通じて理解を深めることで、日常の臨床やスポーツ活動に繋がる学びとなる機会にしたいと思う。

本セミナーの対象は、若手理学療法士やスポーツトレーナー活動に関心のある理学療法士である。将来的にスポーツ現場へ関わりたいと考えている方、臨床にスポーツ的な視点を取り入れたい方に対して、現場の具体的な取り組みやこれまでの経験をお伝えする。

セミナーを通じて、理学療法士がスポーツ現場において障害予防、パフォーマンスアップにどう貢献できるかを具体的に示し、参加者が臨床実践に活かせる視点を提供したい。



略 歴

1979年 広島県東広島市生まれ
2002年3月 香川大学経済学部地域社会システム学科卒業
2002年4月 株式会社広島銀行入行
2006年3月 専門学校穴吹リハビリテーションカレッジ理学療法学科卒業
2006年4月 医療法人社団おると会 浜脇整形外科病院入職
2011年10月 株式会社 横浜 DeNA ベイスターズ 入団
2018年1月 株式会社 広島東洋カープ 入団
2025年1月 独立し「active conditioning support H2O」開業

【資格】

理学療法士
全米ストレングス & コンディショニング協会認定
Certified Strength & Conditioning Specialist

シンポジウム

理学療法士の多様な働き方と可能性 ～新しい領域とつながる～

座長：中村 翔（第 29 回広島県理学療法士学会 準備委員長）

医療法人かしの木会 山本整形外科病院
山下 祐助

近年、子どもたちの運動を取り巻く環境において、運動の過多と過小の二極化が問題視されています。いずれも偏った姿勢や運動による柔軟性の低下や局所の痛みなどを引き起こし、運動器機能不全に陥るリスクとなります。早期発見のために運動器検診も実施されていますが、事後措置が適切に行われず放置されたり、潜在リスクを抱える子どもへの対処も未確立であるなど、十分な効果を発揮されていないのが現状です。このような課題に適切に対処し、子どもたちの健やかな成長・発達を支援することを目的として 2024 年に認定スクールトレーナー（ScT）制度が始まり、現在までに 280 名の認定 ScT が誕生しています。期待される活動の一つは学校や医療機関と連携して、運動器検診の事後措置を適切かつ円滑に実施すること、もう一つは子どもたちに予防教育を通じて、運動の大切さと楽しさを啓発することです。本シンポジウムでは、制度開始からこれまでの活動と今後の課題や展望についてお話しします。



略 歴

【学歴】

2011 年 3 月 広島大学大学院保健学研究科保健学専攻博士課程前期 修了

2009 年 3 月 広島大学医学部保健学科理学療法学専攻 卒業

【職歴】

2011 年 4 月～現在 医療法人かしの木会 山本整形外科病院 リハビリテーション科

【資格】

理学療法士免許（2009 年 4 月取得）

認定理学療法士（運動器）（2018 年 4 月取得）

認定理学療法士（スポーツ理学療法）

（2022 年 4 月取得）

認定スクールトレーナー（2024 年 8 月取得）

株式会社 Shine 訪問看護ステーションかがやき
佐々木 聡子

妊娠・出産に伴う身体変化は一過性ではなく、腰痛や尿失禁、姿勢変化など、生涯にわたる健康課題に影響を及ぼす可能性がある。骨盤帯機能や体幹安定性の変化に対して、産前から身体機能を的確に評価し、育児動作や姿勢、日常生活動作に応じた支援を行うことは、女性の長期的な健康の基盤となるとともに、加齢に伴う身体機能低下の予防にもつながると考える。近年、出産・育児を取り巻く社会環境は多様化しており、理学療法士による支援の必要性は高まっている。産前産後期は特別な分野ではなく、妊娠を契機に生じる身体変化を理解することで、日常的に接するあらゆる年代の患者の支援にも応用できる視点をもたらす。すなわち、ライフステージを通じて健康を支える理学療法の実践に繋がる領域でもある。今回、産前産後の身体変化と支援の実際を紹介し、この分野の視点があらゆる臨床の場で“CONNECT”し、次世代の健康づくりとつながる契機となる事を共有したい。



略 歴

【学歴・資格】

2000 年 国際医療福祉大学保健医療学部理学療法学科卒業 理学療法士免許取得

2019 年 健康増進・参加 認定理学療法士取得

2022 年 県立広島大学大学院経営管理研究科修了（MBA 取得）

【職歴】

2000 年 医療法人徳洲会 千葉西総合病院勤務（担当：ICU/急性期/外来）

2005 年 広島医療生活協同組合 広島共立病院勤務（担当：一般病棟/外来）

2019 年 医療法人社団日の浦会 佐々木産婦人科勤務

株式会社 Shine 訪問看護ステーションかがやき勤務（2021 年～リハビリ部長）

【活動】

・2011 年～産婦人科病院で妊産婦教室担当

・助産師会研修会講師、日本ウィメンズヘルス・メンズヘルス理学療法学会主催学術事業の講師担当、地域での尿失禁教室担当、各地域での産前産後関連の研修会講師多数

・共著：「ウィメンズヘルス・リハビリテーション」メジカルビュー社

・「子どもと母をつなぎ支える理学療法」理学療法ジャーナル 2024:58(12) 等

シンポジウム

理学療法士の多様な働き方と可能性 ～新しい領域とつながる～

座長：中村 翔（第29回広島県理学療法士学会 準備委員長）

株式会社ひなた 福祉用具ステーションひなた
土井 貴詔

訪問理学療法士として在宅支援に携わる中で、福祉用具の選定・調整に関する課題を多く感じていた。より実践的に「生活を支える支援」を学ぶため、福祉用具専門相談員として勤務した。立場を変えたことで見えてきた現場の視点と、他職種から見た理学療法士に求められる役割について私見も含めて報告する。

訪問リハ時代の支援内容と、福祉用具専門相談員としての実践を比較し、利用者支援の視点・課題を整理した。結果、理学療法士としては身体機能や動作に焦点を当てていたが、相談員としては環境・家族・制度を含めた生活全体を捉える必要があることを実感した。今後、理学療法士が福祉用具の視点・知識を持つことで、生活期支援の質が向上し、利用者の“暮らしの再構築”を支える視点を広げるにつながると考える。



略歴

【学歴・職歴】

2013年 帝京大学福岡医療技術学部 卒業
2013年 理学療法士免許取得
2013年4月～ 医療法人光臨会 荒木脳神経外科病院 勤務
2019年4月～ なぎりハビリ訪問看護ステーション 勤務
2020年4月～ 株式会社ひなた 訪問看護リハビリステーションひなた庚午 勤務
2020年7月～ 株式会社ひなた 訪問看護リハビリステーションひなた吉島 開所 勤務
2023年4月～ 株式会社ひなた 福祉用具ステーションひなた 開所 勤務
2023年6月～ 公益社団法人 広島県理学療法士会 理事
2023年12月～ 広島県理学療法士連盟 幹事
現在に至る

【保有資格】

理学療法士、介護支援専門員、福祉用具専門相談員、認定訪問療法士、認知症ケア専門士、3学会合同呼吸療法認定士